



## 忍者(終極忍者)

2007(平成19)年4月1日鑑賞<ユウラク座>

監督・脚本=邱禮濤<sup>ハーマン・キウ</sup> / 出演=魔裟斗<sup>マサト</sup> / 白田久子<sup>ハクダクミ</sup> / 黄聖依<sup>ワウセントイ</sup> / 黄子華<sup>ワウジファ</sup> / 李子雄<sup>レイノウキウ</sup> / 高雄<sup>エディコウ</sup> (アートポート配給 / 2004年日本、香港、中国合作映画 / 95分)

……『爆裂都市』(04年)、『紅蜘蛛女』(05年)に続くアジア・プロジェクトの企画は、香港・日本・中国を結集した忍者プロジェクトに……。K-1ファイター魔裟斗の起用は大ヒットだが、甲賀と伊賀に分かれた忍者たちの「死斗」は『SHINOBI』(05年)同様イマイチ、マンガ的……。ワイヤーアクションとチャンバラアクションを抑え、かつての『忍びの者』シリーズ風の現実味のある忍者と忍者ワザにした方が迫力と真実味を増すのでは……。それとも、そんな風に思う私が古すぎるの……？

### せっかくの「アジア・プロジェクト」だが……？

2004年から動き始めたのが、アートポート社のアジア・プロジェクト。これは任達華<sup>サイモン・ヤム</sup>と千葉真一のアクション大作『爆裂都市』(04年)からスタートしたが、この映画はすごく面白く、「香港映画の掘り出しモノ」だった(『シネマルーム7』343頁参照)。また、その後の坂上香織が中国語で主演した『紅蜘蛛女』(05年)もお色気タップリで、私には興味深い映画だった。

このアジア・プロジェクトはその名のとおおり、香港での映画製作を通じ、アジアの映画ファンに刺激的な作品を発信することを目指したものだから、この『忍者』にも香港・日本・中国(本土)から俳優・スタッフが結集している。そして、『忍者』は、「いかなるウィルスにも抵抗できる奇蹟のワクチン」を物語の核として、伊賀忍者と甲賀忍者の宿命の対決を描いているから、いわば仲間由紀恵とオダギリジョーが主演した『SHINOBI』(05年)とも共通する点がある。しかして、その描き方は……？

アジア・プロジェクトの中に、日本の忍者がどのようにうまく溶け込んで、ストーリー構成されているだろうか……？

## せっかく魔娑斗を起用したのに……

2004年の大晦日の夜に実現したK-1ファイター魔娑斗と「神の子」山本“KID”徳郁との闘いは、最高瞬間視聴率31.6%という驚くべき数字をあげたことでも明らかなおと、見ごたえのある一戦だった。その魔娑斗は細木数子のバックアップもあり(?)、今や若い女性ファンも多く、タレント業や俳優業にも大忙し……？ そのせいか、例によってガラガラのユウラク座の観客席には、いつものような酔っぱらいのおっさん2、3名の他、若い女性連れが2組……。

そんな魔娑斗を起用したのだから、『沈黙』シリーズ絶好調のステイーヴン・セガールおやじのように、カッコいい生身のアクションを披露すればいいのに、この映画ではそのほとんどがワイヤーアクションであるうえ、忍者映画だからチャンバラアクションばかり。しかしそれでは、せっかくK-1ファイター魔娑斗を起用した意味がないのでは……？

## 2人の日本人の広東語は……？

この映画には、甲賀忍者の中忍、虎大介役として魔娑斗が登場するが、もう1人伊賀忍者の下忍、響役として日本人の白田久子が登場する。そして、この2人とも流暢な広東語(?)をしゃべっていることにビックリ。もっとも、『爆裂都市』で好演していた白田久子は、2007年4月からNHK教育テレビ『中国語会話』へのレギュラー出演が決定しているほどだから、中国語をしゃべれる女優というのが持ち味……？ しかし、魔娑斗が流暢な広東語をしゃべれるのは一体なぜ……？

## 中国本土からは……？

今は引退し、霧隠村で隠遁生活を送っている芭蕉(高<sup>エディ・コー</sup>雄)の孫娘シウリン役で登場する美女は、中国本土からこのアジア・プロジェクトに参加した黄<sup>ホアン・シエンイー</sup>聖依。彼女は『カンフーハッスル』(03年)に言葉が不自由で盲目の美少女役で出演していたが、私が「次作には主役として登場し、大ブレイクするかも……？ 私の目には、そんな予感がする美少女に見えたが……？」と書いた(『シネマルーム6』202頁参照)とお

り、彼女はその後『ドラゴン・スクワッド』(05年)では、5人の若きエリート国際警察の紅一点、潜入捜査のスペシャリスト役で大活躍だ(『シネマルーム12』186頁参照)。そんな黄<sup>ホアン・シェンイー</sup>聖<sup>イー</sup>依<sup>イー</sup>が、この映画では心やさしき村娘の一面と、厳しく任務に立ち向かう伊賀忍者の下忍としての一面をうまく演じ分けている。しかし、村娘のファッションはもうひとつあか抜けていないし、忍者スタイルで顔を覆ってしまうとその美しい顔が見えないから、魅力の発揮はイマイチ……？

## 香港からは……？

この映画は、菊池博士が乗っている車を虎大介率いる甲賀忍者衆が襲うシーンから始まり、勧善懲悪的視点からは、菊池博士がワルで、虎大介が正義の味方だと思ってしまうが、実はそうではない。つまり、菊池博士は、いかなるウイルスにも抵抗できる奇跡のワクチンを15年間かけて開発したという立派な人物。それを虎大介が奪おうとしたのは、彼のボスであるブライアンの命令によるもの。ブライアンは、これによって全人類を支配しようとしていたから、実はこのブライアンこそがワル……。

そんな悪役を演ずるのが、香港生まれの李<sup>レイ・チーホン</sup>子<sup>ホン</sup>雄<sup>ホン</sup>だが、もう1人この映画のストーリーの核となる香港人俳優が、ミュージシャンのコピーを演ずる黄<sup>ウォン・ジーワー</sup>子<sup>ワー</sup>華<sup>ワー</sup>。黄<sup>ウォン・ジーワー</sup>子<sup>ワー</sup>華<sup>ワー</sup>は香港の国民的コメディアンとして知られているらしいが、この映画では意外に真面目な一面を……？ またミュージシャンといっても、彼が吹く自作自演のフルート(?)の曲は1曲のみ。またそれは至極単純なものだが、哀愁を帯びたいいメロディで、一度聴けば耳に残るもの。

そして、このメロディこそ菊池博士が大切に持っていたワクチンの入った「開かない箱」を開ける大きなポイントに……。さらに、映画の冒頭、あっけなく殺されてしまう菊池博士が残した「COPY KILL (コピーを殺せ)」という言葉が、映画全体のカギを握るキーワードに……。

## なぜ三つ巴の闘いが……？

この映画のキーマンとなる人物はコピー。なぜなら、「コピーを殺せ」という菊池博士が残した言葉をどう解釈するかは別として、とにかくコピーを捜し出し、連れてくるのが先決問題となったから。そして、コピーを捜し出すために登場する忍者たちが、ブライアンの命令を受けた虎大介の他、菊池博士の弟子だった響そして芭蕉か

らコピーを霧隠村に連れてくるよう命令されたシウリンの3人。以降、この3人の忍者たちが三つ巴となって、コピー争奪戦を展開していくことに……。そこでまずは、三者三様の命令の意義を正確に理解することが大切……。

## うまい話には裏が……？

奇跡のワクチンを内包した箱の開け方をめぐってコピーの争奪戦が展開される中、引退したはずの芭蕉が動き始めたのが、いわば第2ラウンドの物語の始まり。村祭りの晩、コピーと響そしてシウリンが楽しい時間を過ごしている中、1人芭蕉は昔ながらの忍者スタイルに身を固めてブライアンの本拠地に乗込み、箱を奪取。そのうえ、追ってきた甲賀忍者たちの反撃を振り切ったばかりか、見事に虎大介も斬り捨てた……？ そして、村祭りから戻ってきた響たちと家の中で合流し、箱を取り返したこと、虎大介を斬り捨てたことを報告したが、ハテ、それは話がうますぎるのでは……？ うまい話にはきつと裏が……？

## 忍者と忍術をもう少し真面目に

市川雷蔵が主演した『忍びの者』（62年）シリーズは、忍者や忍術を真面目に描いた名作だったが、『SHINOBI』は、さまざまの怪しげな術（？）を操る忍者が、甲賀・伊賀に分かれて各5名ずつ登場するからかなりマンガ的……？

香港人の邱禮濤<sup>ハーマン・ヤウ</sup>監督が描く忍者モノもそれに近いようで、冒頭の菊池博士の襲撃シーンを観ていると、忍者が車よりも速く走ったり、空中高く飛び上がったりのから、『SHINOBI』以上にマンガ的……。そういうマンガ的忍者と忍術を観ていると、いい加減バカバカしくなってくるのは私だけ……？ 日本の伝統である忍者と忍術については、もう少し真面目に描いてほしかったが……。

2007(平成19)年4月4日記